



「私が受け取ったことは、 生涯の中で伝えていきたい」

能楽師●大島衣恵 / Oshima Kinue

能楽シテ方喜多流。福山市光南町出身。2才、「鞍馬天狗」の稚児で初舞台。東京芸術大学音楽学部音楽科卒業。平成10年、喜多流では初めて女性で(社)能楽協会に登録。喜多流大島能楽堂を中心に活動し、福山八幡宮薪能、三和の森光徳寺薪能、リーデンローズの舞台などに出演。2009年には、福山青年会議所の理事長を勤める。

「プロ」になれないかもしれない。
でも、進んだ能楽師への道

能とは、幽霊や精霊、天女などが登場する仮面劇で、主役を演じるシテ方は、面をつけることで、外に向けてアピールするのではなく、自分と対峙して役になりきる。江戸時代から続くこのシテ方の一派が喜多流である。

大島さんは、この喜多流宗家直系の「戦分」(プロの能楽師。宗家以外では最高の職位)である家に生まれ、2・3歳から小学生までの間、子方という子役として舞台上に立った。その後も稽古を重ね、次第に一生の仕事にしたいという思いが募りはじめた。当時、喜多流は「プロ」として舞台上に立つ女性を認めていないという現実があったが、それでも、能と関わることを学びたい、と日本で唯一、能の実技ができる東京芸術大学に進学し、小鼓を専攻した。

周囲には、すでに舞台上で活躍をしている人、能楽師の家系でなくとも資格を取って舞台上に立とうとしている女性など、多くの刺激し合える仲間

間がいた。

卒業が近づき、大学院進学や企業への就職が頭をよぎり出したが、先生や家族の助言を聞いた上で、師匠である父がいる福山に戻り、修行させてもらうことを決意した。

「今は、プロ」になることは無理かもしれない。でも、続けていけば道が開けると思った」

可能性はあるはずだから、自分でダメだ、と決めつけてはいけなさと考え、後悔しない生き方を選んだのだ。

「仕事は何をしても大変だけど、自分が決めた道なら、自分で責任がとれる」

その後、修練を重ね、実力が認められた大島さんは、平成10年、喜多流では初めての女性の「プロ」になった。

「自分らしさは、
自然と出るものだと思います」

幼い頃、弟と二人で舞う稽古があった。一年多く稽古を積んでいる分、うまく舞うことができていると思っ

—能とは何か、日本の伝統文化を大切にしたい気持ちとは？
私は今まで一度も考えたことがなかった。生まれた時から能という世界が身近にあった女性が、何を思いながら舞台上に立つのか聞かせていただいた。それは、積み重ねてきた経験に裏づけられ、心の奥にストンとはまる言葉の数々だった。(取材/和田秀美)

女
チカラ

大島 衣恵

1/50 Q&A

Q.今、チカラを入れていることは？

A.日本の文化を海外の人にも知っていただくために、英語能に取り組んでいること。

Q.チカラの源は？

A.いろいろな人に支えてもらっていること。

Q.キッカケとなったチカラは？

A.浮き沈みがあっても、絶えず次に繋げていこうという気持ちを持ってやってきたこと。

Q.広島のチカラとは？

A.奥行きがあって、潜在能力が高い。発掘していくと、たくさんの宝物が埋まっていると思う。

Q.女チカラ・男チカラとは？

A.女チカラ：いろんなものを育てていくこと。
男チカラ：新しいものを切り開いていくこと。

●『仏塔 (バゴタ)』

創作英語新作能。
ヨーロッパ公演 (写真 上中)

【HP】能喜多流大島能楽堂
<http://www.noh-oshima.com/>



ていると、祖父から「注意しないからって、ちゃんとできているわけじゃないぞ」と一喝されたそう。今思えば、慢心を突かれたのだと振り返る。演者としての動きは全てがソロパートだが、それぞれがチカラを出し合うことで一つのまとまった舞台となる。亡くなった祖父でさえ、一度も「上手にできた」と言ったことはない。

もちろん、日々の努力は欠かせない。舞の稽古は反復練習。繰り返ししているうちに、自分の意識とは別のところで勝手に身体が動くようになっていくこと。能は何より、型に入っている、能を舞う中で、自分をどうやって表現していくのか、と投げかけてみた。

「同じ制服を着ていても、そこにでてくる雰囲気は違うもの。自分らしくやろうと思っても、自分なりにしかできない」

続けて大島さんは、「自分探し」という言葉への疑問を投げ返す。いかに自分の理想に近づけるかを探究す

ることが自分探しであり、自分自身は探すものではない、と。

能の場合、意識的に自分を出すというより、いかに理想的な型で舞うか、ということに魂を傾けていく。「自分らしさは、出そうとしなくても、自然と出るものだと思います」

伝えたいものがあるから、活動のフィールドは広がっていく

日本の文化をより多くの人に伝えたいという志を持つ大島さんの活動の場は、舞台の上に限まらない。大学で客員教授として教壇に立つことも多く、2009年には、女性としては初めて、福山青年会議所の理事長を勤めた。

さらに、新たな試みとして、創作英語新作能『仏塔 (バゴタ)』のヨーロッパ公演に主演した。大島能楽堂での定期公演に感動した中国系英国人の原作者からの熱いオファーがキッカケだった。

元々はミュージカルの台本だったのだが、大島家とも親交の厚い米国人能楽研究家の協力の下に能に仕立

て直し、全編英語で上演した。ますます活躍のフィールドを広げている大島さんに、また因々しくも投げかけてみた。やりたいことが見つけられない人たちに何かアドバイスはないか、と。

すると、間髪を入れずに返ってきた。「自分のやりたいことを探すのではなく、自分のできることから、社会に役立つものをと探して探してはどうかな」

世間に流布している「自分探し」という言葉に違和感を持つ大島さんならではの答えだった。それも、仕事に対する「プロ」としての自信に裏づけられている。

最後も、大島さんからしか聞けない言葉で、締め括りたい。

「伝統は、結果的に伝統となっている。伝える人の次に、伝える人がいる、その連鎖でしかない。私も受け取ったことは、生涯の中で伝えていきたい」